

わが古典鑑賞

小島政二郎

筑摩叢書 14

わが古典鑑賞

小島政二郎



筑摩書房

小島政二郎（こじま まさじろう）

1894年，東京に生まれる

1918年，慶応義塾大学文学部卒

著書 — 「海燕」「花咲く樹」

「眼中の人」「円朝」

「女中列伝」「おこま」ほか多数。

わが古典鑑賞

筑摩叢書 14

昭和39年3月30日発行

¥ 350

著 者 小 島 政 二 郎

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 星 野 正 一 郎

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2 の 8

電話 東京 (291) 7651 番 (代表)

振 替 東 京 4 1 2 3 番

© 1964

星野印刷・九段製本

目次

堤中納言物語……………五

大鏡……………五

落窪物語……………九

今昔物語……………一四

かげろふの日記……………二九

あとがき……………二八

堤中納言物語

まず一つ一つの題を御覧下さい。

花桜折る少将

このついで

虫愛^めづる姫君

ほどくの懸^け想^そ

逢坂^{あふさか}越えぬ権中納言

貝合はせ

思はぬ方^{かた}に泊まりする少将

は、な、だ、の、女、御

—

はいずみ

よしなしごと

一二を除いて、あとはみんな気の利いた、いかにも機智に富んだ短篇小説らしい題ではないか。この巧妙な題名が示すように、「堤中納言物語」は、文学の花野である平安朝に於いても、卓立した無類の短篇小説集である。この十篇の短篇小説のうち、「堤中納言物語」に最高の価値を与えているものは、「思はぬ方に泊まりする少将」「逢坂越えぬ権中納言」「はいずみ」「虫愛つる姫君」「貝合はせ」の五篇であろう。平安朝には、長篇小説、中篇小説の作が多く、短篇小説は少い。時代を異にして、僅かに「堤中納言物語」と「今昔物語」の二つの山が聳えているばかりである。一は山容京都の山の如く秀麗、一は昼々たる一大山脈を大空のもとに横たえている。

二

何から語ろう。十もはいつている個人の短篇集を読む場合、三つも読むと、その作者の体臭と言ったようなものに飽きて、ちょいと一息つきたくなるものだ。短篇小説の王と言われるモーパッサンを読んでも、この嘆は免かれ得ない。ところが、「堤中納言物語」に限って、それが無い。巧みに体臭を消して、題材のヴァリエティに我々の興味をそのつど新鮮な

らしめる異常な才能を持っている。尤も、モーパッサンは四百も書き、「堤中納言物語」の作者は生涯に十しか書いていないというハンヂキヤップがあるにはあるが——。いや、十が十、同じ作者によって書かれたのではあるまいという説さえあるけれど——

その点、私はその方面の学問をしていないから、同一の作者によって書かれたものか、別の作者によって一つ一つ書かれたものか、分らない。ただ通説では、堤中納言と一口に呼ばれている人によって書かれたということになっている。堤中納言というのは、加茂川の堤に屋敷を構えている中納言藤原兼輔をさしているのだとのことである。しかし、最近の研究によると、「堤中納言物語」の作者は、意外にも、和泉式部の娘の小式部だということが判明した由を「朝日新聞」（昭和十四年一月八日）は報じていた。私は作者に名誉を与えたいために、同一人によって十篇とも書かれたということにしたいのである。

題材がヴァレティに富んでいるということを、私は「堤中納言物語」の第一の特徴に上げたいと思う。「思はぬ方に泊まりする少将」で、無性格の女の愛らしさを書いているかと思うと、「虫愛づる姫君」では、毛虫を恋よりも愛している若い変態の女を書いている。「はいずみ」で軽薄な女を書いているかと思うと、「逢坂越えぬ権中納言」では、一種のビュリタンとも言うべき女性を書いている。「貝合はせ」で子供の世界を書いているかと思うと、「よしなしごと」では坊さんの途方もない譚言長語を書翰体で書いている。そう言ったよう

に、「またか」と思わせるような類似のストーリーも性格も一つもない。

もう一つの特徴は、平安朝の大抵の小説が、上流も上流、貴族中の貴族の世界が舞台に取られている。が、「堤中納言物語」の舞台は、貴族ではあるが、上流中の上流、貴族中の貴族ではない。貴族の中の中流、或はそれ以下の生活が書かれている。こんなことも、平安朝の貴族文学に飽いている我々にとっては、実に新鮮な救いである。「今昔物語」になると、もっと品がさがって、我々庶民階級に題材を取っていてくれる。

都会生活に於いて、人力車がすたれて電車になり、市内電車よりも国電が喜ばれ、国電にも増して自動車を迎えられるのは、どういう理由か。一トロに言えば、テンポの早い近代生活のリズムに合うか合わないかにあるだろう。平安朝の大概の小説が我々の愛読を得ないおもなる理由は、言語、表現の障害を別にすれば、このリズムの問題に起因していると思う。小説が展開するテンポののろさが、我々の呼吸する生活のリズムと一緒にならないもどかしさにあると思う。このもどかしさは、理窟や趣味の問題ではない。もっと肉体的なもの、もっと生活的なものだろう。

ところが、「堤中納言物語」に打っているリズムは、我々のリズムと一致する楽しさを持っている。描写の簡潔なこと、話術の巧妙なこと、展開の自然でしかも短篇小説的速度と曲折とを豊かに持っていること、全体の構想の引き締まって、美しいばかりに力の籠っている

こと、十九世紀のフランスの短篇小説を見るようだ。この作者は、心にくいばかりに短篇小説の骨法こっぽうを会得し把握はあくしている。ほかの平安朝の小説が、時と共に老いることがあっても、「堤中納言物語」だけは、「今昔物語」と共に、永久に新緑のような魅力を祝福されるであろう。

三

小説くらい自由な芸術形式はあるまい。こうした素材を、こう書かなければ小説にならないなどということは、どんな厳きびしい批評家も言わないだろう。小説家の体質、氣質に従って、どんな形式の小説も許される。そこが散文芸術の有難みであり、散文芸術の隣にはすぐ人生があると言われる所以ゆゑである。が、近代小説の正統せいとうは、いつの間にか、誰が極きめたともなく、写実主義リアリズムということになってしまった。これは理論ではない、文学史的事実である。

では、写実主義リアリズムの文学とはどういう文学かというのに、一ト口に言えば、あるがままに人生の真の姿を写そうという文学である。

長篇小説と違って、短篇小説は、よりハッキリとした主題テーマが本質的に要求される。この本質的な要求に答えるために、短篇小説は、劇的な要素と技巧とを必然的に具備していなければならぬ。そういう意味では、より人巧的な構成法のもとに置かれていると言っていいだ

ろう。

今私は、リアリズムの文学とは、あるがままに人生の眞の姿を写す文学だと言った。同時に、短篇小説は人巧的な構成法のもとに置かれた文学だとも言った。この二つの原則は相矛盾しないか。しないのである。人巧的と言っても、長篇小説に比べての話で、眞実感を破壊するほど人巧が目立つようでは、近代小説として通用しないのである。眞実感を失わない程度に於いて人巧的であることを必須とする。その点、あの有名な「たゞ見ればなんの苦もなき水鳥の足に暇なきわが思ひかな」という歌の心に似ている。小説家は、何とかして人の好奇心を捉えようとして全力を上げて構成に新奇を競っている。その点、水鳥の足に暇なきわが思ひかなである。しかし、読者の目には、なんの苦もなき水鳥のように見えてもらいたいのだ。つまり眞実感を破壊していると看破されたくないと願っているのだ。

が、底を割って見せれば、人巧を弄さない限り、面白い短篇小説は成り立たない。人巧というのとはそういう意味だと理解して頂きたい。

構成は人巧的。しかし、素材は——言い換えると、人物の性格とか、境遇とか、会話とか、心理とか、そう言ったものはすべて生きた人生から把握して来なければならない。素材は徹徹底底人生の本物ばかりを使わなければならない。

その際、上ツ面のリアルでなしに、人間の、人生の深いところに隠れているリアルを把握

するほど真実の度の深い小説が書ける訳である。真実の度の深いリアルを探り当てるには、異常な洞察力を必要とする。ここまで来ると、その小説家の素質の問題だ。異常な洞察力といふことは、異常な素質ということにはかならない。

異常な素質によって、異常な——質に於いても、深さに於いても、常人には発見することの出来ない人間性の真、人生の真を発見したとする。が、折角発見した異常な真が、深さと質とに於いて異常なるが故に、常人である一般の読者の理解のそとにある場合があり得る。そんな時、不遇の天才の悲劇が起るのである。だから、常識的に言って、最も望ましい場合は、異常な真であると同時に、普遍性のある真を発見することが必要になって来る。

小説家の地獄の苦しみは、一つの体で、一つの魂で、自分自身が発見したあらゆる真に一つ一つ転身して、身をもってその真の内容を生活して来なければ、折角発見した真の姿を再現出来ないことだ。再現することが出来なければ、描かざる画家と同じことである。よく「あの小説家は行き詰まった」という批評を聞くが、それは幾つかの異なった真に転身した後、もう新しい真に転身出来なくなった作家の謂いであろう。優れた作家ほど、数多の異なった真に転身し得る魂の柔軟性をいつまでも失わないのだ。

バルザックの小説は、人間記録の倉庫だと言われている。さながらにしてまた別個の宇宙であると言われている。この宇宙に棲息するもの二千人。驚くなかれ、バルザックは身一つ

をもって二千人の生活に転身したのだ。転身し生活しなければ、一行も書けないのが小説家の十字架なのである。また同時に、この転身の楽しみこそ、小説家が何物とも交換することを肯んじない彼の至幸至福であることも忘れてもらいたくない。

なぜ私がこんなことを長々と書いて来たのかと読者は怪しまれるかも知れない。他意がある訳ではない。「堤中納言物語」の作者が、女の身をもって、いかにこの困難な転身を見事にしかも完全に成し遂げているかを語ることが、私の鑑賞のすべてだからである。

彼女は、短篇小説の天才である。千年も昔の平安朝にあって、十九世紀のフランスが漸く発見した近代短篇小説の作法を、夙に五つの傑作の上に、輝かしい先駆者として、いや、名誉ある第一祖として、古典的完成の美しい栄光のうちに、五つの星の如く創造していたのである。

四

彼女は、まず第一に何者に転身したか。

「虫愛づる姫君」に於いて、彼女は自分自身よりも毛虫を愛する変態の若い女性に転身している。この女は、按察使ノ大納言の娘で、常々、

「人々の、花や蝶々と愛づるこそ、果敢なう怪しけれ。人は実あり、本地尋ねたるこそ、心

ばへをかしけれ」

これを今の言葉に直すと、人々が花や蝶ばかりを美しいものと思って賞美するのは、私に言わせれば、余りに考えが浅いように思われる。人間をgoranない、赤ん坊から子供、少年から青年、青年から壮年、壮年から老年、そうして死、この変化の底に人間の実体、本質がある。それと同じように、花や蝶の変化成長のうちに彼等の本質を発見してこそ面白味もあり、意義もあるのだ。——そんな意味になると思う。そういう考えから、彼女はいろいろな虫を籠かごに集めて、その変化成長の経過を眺めるのを無上の楽しみにしていた。分けても毛虫が思慮の深い姿をしているのが奥床おくふかしいと言って、垂れさがる髪をうるさそうに耳のうしろへ挟はさみながら、毛虫を掌てのひらに載せてコロリコロリと転ころがるさまを目を放たずに見守っていた。彼女の考えに従うと、すべて取り繕うのはよくない、自然のままが一番いい。だから、彼女は眉まゆは一切抜かず、齒かは鉄漿かねで染めずに白いまま、髪は梳くしらず、一切化粧というものをしない。そのくらいだから、着物の着方きかたも下手で、「頭へ衣きぬを着上げた」ように不様ぶざまに着ている。

それでは醜婦みにくかというのに、そうでもない。これは私の一言いつ言ではなく、右馬ノ助うまのすけというこの女性を垣間かきま見た公達きんだちの一人がそう言うのだから信用していいだろう。

これほど装振くわんりに構くわらないのにもかかわらず、彼女は「眉いと黒く華々はなびらと鮮あざかに涼しげに

見えたり、口付も愛嬌あいけうつきて清けげなれど、齒黒はぐろ付けねばいと世づかず（艶なまめかしくない）。化粧けそうしたらば清けげにはありぬべし。かくまで變やうしたれど、醜みにくくなどはあらで、いと様異さまことに、鮮あざやかに氣高けく、華はなやかなるさまぞ口惜あはらしき」

丈たけも程ほどよいくらい、ただ手入れをしないので、髪に艶つやがない。その上削そぐことをしないので、ふさふさとしていないのが傷だ。右馬ノ助はそう言っている。

こうした娘を持つた親の心配は察するに難くないであらう。両親が代る代る意見をするのだが、一向聞き入れない。それどころか、あべこべに両親の方が理窟で言い負かされること何度々だった。その一例を示すと、

親「人は容貌みづめをかしき事をこそ好むなれ。醜みにくけげなる毛虫かむしを興きずなると、世の人の聞かむ、いと怪し」

娘「苦しからず。万よろづのことどもを尋ねて、末を見ればこそ事は故ゆゑあれ。（世間の人の言うことなどは）いと幼こきことなり。毛虫の蝶とはなるなり、衣きぬとて人の着るもの、蚕のまだ羽根付かぬに仕出しだし、蝶になりぬれば無駄あだになりぬるをや」

こう言つた調子なので、さすがの両親も齒が立たなかつた。娘はしまいには、

「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」と言つて、簾すだれを少し巻き上げて、几帳きちやうを隔へててしか人に会わなくなつた。